

京都大学の個別学力検査の出題方針について

京都大学が入学者を選抜するため実施する個別学力検査の出題教科・科目は、高等学校学習指導要領による教育課程にしたがって学ぶ教科と科目に対応しています。出題教科・科目における出題範囲と学習指導要領上の教科・科目の関係は次の表のとおりです。

出題教科・科目	学習指導要領上の教科・科目
国語	
文系、理系	現代の国語、言語文化、論理国語、文学国語、古典探究
地理歴史	
日本史	日本史探究
世界史	世界史探究
地理	地理探究
数学	
文系	数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、数学B、数学C
理系	数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ、数学A、数学B、数学C
理科	
物理	物理基礎、物理
化学	化学基礎、化学
生物	生物基礎、生物
地学	地学基礎、地学
外国語	
英語	英語コミュニケーションⅠ、英語コミュニケーションⅡ、英語コミュニケーションⅢ、論理・表現Ⅰ、論理・表現Ⅱ、論理・表現Ⅲ
ドイツ語	
フランス語	
中国語	

京都大学の学部(医学部の場合、学科)は、それぞれの入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)に基づいて個別学力検査の内容を定めています。京都大学が実施する個別学力検査は、知識の活用から思考力と表現力まで、入学志願者に備わった学習能力を評価します。

この「出題方針」は、高等学校段階までにどのような学習能力と学習態度を培うことを求めているのか、また、そうした能力と態度をどのような基準により評価しようとしているのかを示すものです。

高等学校の教育課程は、国語、地理歴史、数学、理科、外国語だけからなるものではありません。京都大学が入学志願者に求めている学習能力は、高等学校の教育課程全般を通じて培われてくるものです。

こうして出題方針を示すことが、京都大学の入学志願者が受ける個別学力検査を理解するために役立つことを期待しています。

1. 国語の出題方針

「国語」では、日本語の文章の論理や論旨、あるいは作者の心情や表現の意図を、的確に理解し、自らの言葉で論理的にその理解を表現できることを評価します。そのため、文章のジャンルとして論説文、随筆、小説など、さらに文体についても明治擬古文まで含め、幅広く問題文を選び、漢字の書き取りや、文章表現の持つ意味、あるいは論理展開の説明をはじめとして、登場人物の言動に託された著者の意図、さらには問題文全体の論旨を問うなど、論述の形式で問題を課します。

古典文法についての正確な理解を持つとともに、古典の修辞などの基礎知識を持ち、的確に古文及び漢文の文章を理解できると同時に、原文を現代語訳できることを評価します。そのため、物語や歴史、随筆、日記をはじめとして、ジャンルや時代を限らず、幅広く問題文を選び、語句や修辞の説明、文章の現代語訳、さらに登場人物の言動の理解から問題文全体の論旨に至るまで、様々な形式で論述問題を課します。

「国語」は、国語(文系)と国語(理系)と区分をして出題します。この二つの間で、学習指導要領の国語科の科目からみて出題の範囲に変わりはありませんが、出題される問題が異なることがあります。

2. 地理歴史の出題方針

日本史

「日本史」では、原始・古代から現代まで各時代の政治・社会・文化の特色を、個別の事象や知識を相互に関係づけて捉え、現代日本の諸課題を踏まえつつ前後の時代や世界史との関係において考える、分析力と俯瞰力が求められます。また、教科書をはじめとした歴史叙述は、遺跡・遺物や文書・記録など様々な歴史資料の研究成果に基づいていま

すが、こうした歴史資料に親しみ、それらを多面的に検討し自ら読み解いていく意欲と能力が求められます。なお、「日本」という領域は歴史的に形成されてきたものですが、その側面を各時代の周辺諸地域との交流や国際的な諸関係の中に位置づけて理解することも必要だと考えています。

「日本史」の出題では、以上のような観点から、教科書から得られる基礎的な知識を活用して、広い視野で歴史を総合的に理解する力を問う問題や、事象の正確な把握を踏まえ、道筋を立てて説明する能力を問う問題を、出題します。

世界史

「世界史」では、個々の地域世界の成立と発展、地域世界間の交流、近代以降の時代における諸地域世界の結合と変容、そして今日の地球世界の到来という世界史の潮流を、総合的に捉えるとともに、歴史に見られる課題を把握して主体的に探究し、議論する能力が求められます。

「世界史」の出題では、狭義の一国史よりも地域世界を単位として重視しつつ、政治・社会・文化の様々な側面について、個々の地域世界の内部の展開及び地域世界相互の関係、そして今日のグローバル化した国際社会の成立にいたる過程を適切に把握しているかを問うことに重点を置いています。このような観点から、教科書に記載されている個々の歴史的事象をその背景とともに理解しているかを問う問題や、課題を主体的に探究する前提として様々な歴史的事象を一貫した論理の下に相互に関連づけて歴史的潮流を説明する能力を問う問題を、出題しています。

地理

「地理」では、現代世界の地理的事象を、自然環境、資源、産業、交通・通信、観光、人口、都市・村落、生活文化、民族・宗教などの側面から理解する系統地理的能力、並びに、現代世界の諸地域について、地域的特色や地域の結び付きなどを理解する地誌的能力とともに、今日の諸課題に関する地球的視野からの多面的・多角的な考察力が求められます。

「地理」の出題では、基礎的な知識・技能

を踏まえた、広い理解力や論理的な思考力を問うことに重点を置いています。このような観点から、地図(地形図を含む)、写真、統計などの資料も用いつつ、世界の地理的諸事象の立地や分布、社会と自然環境の相互関係、空間的な相互作用、場所や地域の形成要因やその時間的変化についての的確に説明する能力を問う問題を、出題しています。

3. 数学の出題方針

我が国の高等学校と中学校では、身近な現象や事象を「数学」の視点から捉えて数学の問題を作り出すこと、また数学に現れる様々な事項を理解して論理的に考察したり処理したりすること、さらには得られた数学的な知識を利用して身近な現象・事象の理解を深めたり問題解決に役立てることの全般を「数学的活動」と呼んでいます。このような数学的活動を通して、数学における基本的な概念や原理・法則の体系的な理解を深めること、事象や現象を数学的に表現する能力を高めること、さらには学習を通して創造性の基礎を涵養するとともに数学の良さを認識し、数学的な知識を論理的根拠に基づいて積極的に活用して判断しようとする態度を育てることが高等学校における数学学習の目標であると、学習指導要領は定めています。本学の個別学力検査における数学は、高等学校卒業までに学習する「数学」について、入学志願者がこの学習目標をどの程度達成しているかを評価し判断するものです。

数学の学力とは、単に計算力や論理力だけを指すものではなく、数学的な直観力や、式や数学の概念を利用した表現力なども含まれるものと考えています。したがって、我が国の小学校入学から高等学校卒業までに学習する数学的な概念、原理・法則、公式などの事項のすべてについて、個々の知識の有無だけを単に評価するのではなく、上述のような総合的な数学力を評価する問題を出題するように心掛けています。このため、個別学力検査では、数学的な表現力を評価するため、論述形式の解答となるような出題を主体にします。

具体的には、計算問題であっても、単に計算結果だけではなく、その過程や背後の論理性を評価するような出題を心掛けています。

また、論理を問う問題では直観、類推、帰納、演繹などの数学的考察を正確な数学的表現力で記述する能力を評価できるような出題を心掛けています。数学の問題ではいわゆる「正解」に至ることは大切ですが、「正解に至る論理的に正しい過程」も正解と同様に大切です。

高等学校卒業までに学習する概念、原理、法則、公式といった数学的な知識や事項の記述は、現状では教科書によってその扱いや書き方が多少異なっていますが、本学の数学において出題範囲としている内容について、いずれかの検定済教科書で記述されている事項はすべて出題範囲に含まれていると考えています。現状の数学の高等学校用検定済教科書の内容は、高等学校学習指導要領を踏まえてそこに定められる事項をすべて含みつつ、高等学校卒業までに培われる「数学的活動」の能力によって修得できる程度の事項について幅広く記述されています。したがって、個別学力検査における出題に際しても、高等学校学習指導要領を十分に踏まえた上で、いずれかの検定済教科書で記述されている程度の、高等学校卒業までに得られる論理力から理解できる程度の幅広い事項は出題対象であると考えています。問題作成にあたっては、単発的な個別の数学的知識を問う問題や、解法の暗記によって対処できるような問題を排するよう心掛けています。さらに、出題範囲に含まれている複数単元でそれぞれに学習する数学的な知識を論理的・系統的に理解することによって問題解決に到達するいわゆる「融合問題」の出題を通して、数学的な知識の活用力も評価します。

数学（文系）と数学（理系）の間では出題される問題が異なることがありますが、出題の方針に変わりはありません。

4. 理科の出題方針

物理

高等学校で学ぶ物理では、物理学の基本的な概念や原理・法則の理解を深め、体系化された知識に基づいて自然の事物・現象を分析的かつ総合的に考察する能力を身に付けることを目標としています。物理学の基礎知識や考え方は、「力と運動」、「エネルギー」、「電気と磁気」、「波」、「熱と温度」、「分子や原子」

といった様々な概念や原理・法則を系統的に理解するために必須のものであり、十分な修得が求められます。

個別学力検査「物理」では、物理学に関する基本的事項の理解度をみるために、本学が指定する出題範囲から、できるだけ分野的な偏りが無いように出題します。出題の形式においては、知識の確認、物理的思考、計算力を総合的に判断できるように問題を配置します。さらに、思考の過程と論証力を測る目的の記述式問題も出題します。そして、知識の羅列のみでなく、物理的思考、論証力、計算力を総合的に評価します。

化学

高等学校で学ぶ化学では、原子・分子と化学結合の概念を正しく捉えた上で、物質の性質や物質の変化に関する基本的な原理・法則の理解を深めることを目標としています。また、それらの原理・法則をただ記憶するのではなく、観察・実験を通して物質の具体的な性質や反応と結び付けて理解し、それらを活用する能力を身に付けることを目指しています。すなわち、無機物質、有機化合物、高分子化合物などの個々の性質や反応についての知識を単に蓄積するのではなく、それらに基づいて論理的に思考できることが重要です。

個別学力検査「化学」では、化学に関する基本的事項の理解度をみるために、本学が指定する出題範囲から、できるだけ分野的な偏りが無いように出題します。出題にあたっては、物質に関する基本的な知識が身に付いているかを問い、化学の基本となる概念や原理・法則を活用する能力を試します。さらに、反応式、構造式を適切に表記し、定性的あるいは定量的な考察を論理的に記述できるかも問います。

生物

高等学校で学ぶ生物では、生物や生物現象への関心を高め、目的を持って観察・実験を行い、生物学的に探求する能力を身に付けるとともに、生物学の基本的な概念や原理・法則を理解することを目標としています。遺伝子から生態系にいたる様々な生物学的事象についての基礎知識は、現代社会が直面する

医療、生命倫理、食料生産、環境保全、生物多様性保全といった重要な課題に対応する上で必須のものであり、十分な修得が求められます。

個別学力検査「生物」では、生物学に関する基本的事項の理解度をみるために、本学が指定する出題範囲から、できるだけ分野的な偏りがないように出題します。さらに、修得した知識に基づいて、生物や生物現象に関する観察や実験の結果を適切に解釈し結論を導く能力を重視し、それを評価するために、記述・論述問題を取り入れます。

地学

高等学校で学ぶ地学では、日常生活や社会との関連を図りながら、地球と地球を取り巻く環境、及び宇宙への関心を高め、目的意識を持って観察・実験などを行い、地学的に探究する能力と態度を育成するとともに、地学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な自然観を養うことを目標としています。

個別学力検査「地学」では、地学に関する基本的事項の理解度をみるために、本学が指定する出題範囲から、できるだけ分野的な偏りがないように出題します。また、個別的な知識を問うだけでなく、地学的な基礎知識を活用して地学的現象を科学的に理解し、総合的かつ論理的に説明し、記述する能力を評価できるような問題を出題します。

5. 外国語の出題方針

外国語については、英語、ドイツ語、フランス語、中国語を出題します。

入学志願者には、外国語で書かれた情報を正確に理解するだけでなく、自らの主張や意見を、外国語を使って発信する能力を培うことを求めます。個別学力検査では、出題する個々の言語についての基礎的な学力とその応用力を評価の対象とします。以下、英語を例として出題の方針を説明します。

個別学力検査「英語」では、ただ単に英語を話すだけではなく、英語で書かれた論文や学術的な内容の記事を正しく理解し、その内容を的確にまとめ、それに対する自己の見解を効果的に表現するという、高い英語コミュニケーション能力を身に付ける上での基礎

的な学力とその応用力を問います。この高い英語コミュニケーション能力は、しっかりした語彙力や慣用表現の知識、構文や文法の理解などを基盤としてようやく実現されるものです。

このような基礎的な学力とその応用力を問うために、まとまった内容の英文和訳や和文英訳を求める問題を多用します。語彙知識を問うことに加えて、文法事項のうちでも特に論理的な思考と表現に欠かせない関係代名詞や関係副詞、仮定法、分詞構文などの理解力や、代名詞の指示対象の的確な理解力を問います。未学習の語句の意味を前後の文脈から正しく推測して、文章全体の主旨を速やかに把握する能力も問います。このような出題を通して、単なる訳出ではなく、包括的な英語の理解力と表現力を重視して評価します。